

靈芝元照の浄土思想

柏倉明裕

一 靈芝元照(一〇四八―一一一六)は南山律宗の復興者として、また浄土教を養じ法然門下に影響を及ぼした人物として広く知られている。元照は四明知礼(九六〇―一〇二八)が『観経疏妙宗鈔』で説いた天台教学に基づいた浄土教に対して批判を行うことによって独自の浄土教を成立させている。拙論では天台宗との関係の面から元照が天台宗の浄土教をどのようにに批判し、どのような浄土教を明らかにしているのかについて論じ、元照の浄土教の位置付けを明確にすることを目的とするものである。

二

元照は余杭錢塘の人で、字は湛然、安忍子と号す。元照は出家した後に神悟処謙に出会い、桐江折英と共に天台教観を修習し、浄土教に於いても処謙の感化の影響を蒙っている。また処謙の師である神照本如は四明三家の一人であり、浄土教については左図のように慈雲遵式の浄土教を嗣いでいる。

知礼

遵式――本如――処謙

折英
元照

元照は「毎日生弘律範。死帰安養。平生所得惟二法門^①」と述べ、律と浄土を並列して二法門として分けて衆生に説いており、律と

浄土教が融合しておらず、その浄土教は純粹性を保っているといえる。元照は戒律を守ることを捨てて浄土教に帰入したわけでも、律宗の立場で浄土教を説いているわけでもないのである。

三

元照は『上檣菴法師論十六観経所用観法書』の中で次のように知礼の説いた浄土教に対して批判を行っている。

大抵諸師章記並以十六妙観混同止観法。故有観心観仏之諍約心観仏之漫耳。^②

元照が「観心観仏の諍、約心観仏の漫(慢)」と述べていることは知礼の弟子である広智尚賢と雪川仁岳が『観経』の観法について観心、観仏の論争を行い、これに対して知礼が「約心観仏」ということを以て裁決し、二家を双収したということによる。知礼は大乗の行人は唯心ということで我が一心に諸法の性を具していることを知っている、仏を所観として心観を修するならば自己に具しているところの仏も自ずから顯われ、弥陀の依正を所観とすれば心性に本具する極樂依正が発生する。まったく心性を離れて依正があるのではなく、「全心是仏、全仏是心」であり、終日観心すること、終日観仏することは異なるものではなく、観仏がそのまま観心であることを説き、ただ心は観法を修する行者にとって最も身近で、最も重要であるという「近要の義」によって約心観仏と主張する。このように阿弥陀仏を観想することも、自己の心を観想することも異ならないという知礼の主張は、元照にとってみれば『観経』十六観と止観観法の混同と映るのである。

知礼のこのような天台教観に基づいて『観経』を解釈する方法について、元照は天台観法と十六観を混同することなく、両者を所観の境に随って分けるべきを提唱している。元照は諸大乘観法

について能観は一つであるが、所観の境について大きく二種に分類している。一つは心を所観となす立場であり、今述べた天台止観や賢首法界観、還源観、南山淨心観、少林壁観等の現前寛心の体性を指して浄土となす場合で、これを破惑入道無生理観とする。もう一つは諸仏菩薩修功德依正色像を以て所観となす立場であり、『観経』をはじめ『観仏相海経』『普賢行法経』『観弥勒上生経』等がこれに相当する。特に『観経』は釈迦や普賢菩薩を観じて生を求めないことに異なつて、想を西方十万億刹の弥陀の依正に送り、その浄土に生ずることを求める。このように元照は天台止観と『観経』十六観を分け、十六観は浄土に生ずることを求める観であり、天台止観のように現前心を浄土となす観ではないことを明確に定義しなおしている。

元照が説く浄土の法について具体的に明らかにすれば「五濁悪世。末法之時。惑業深纏。慣習難断。自無道力。何由修証」^③等と浄土の教えを行ずる機についてのべている。元照の衆生観はこのような五濁悪世の末法に生まれたという深刻な時機観と惑業に纏縛される人間に対する深い洞察を以てなされている。「自慨此身久沈苦海。漂流生死孤露無依」と述べているように、それは単なる一般的な衆生論ではなく、自らの深い機の自覚に基づいている。また元照は『阿弥陀経疏』の中で善導の『往生礼賛』の文を次のように引用する。

善導問曰。何故不令作観。直遣専称名号。有何意耶。答曰。乃由衆生障重境細心麤識颺、神飛観難成就。是以大聖悲憐直勸称名号。正由称名易故相続即生。^⑤

つまり衆生は障が重く、境が細く、心が麤であり、識颺神飛して観が成就し難いので、大聖は悲憐して直ちに専ら名号を称するこ

とを勧め、正しく称名の易きに由る故に相続すれば即ち生ずることができるといふことであり、元照は観法ができなくとも執持名号によって往生することを説く。元照はこの『往生礼賛』の文によって『観経』の十六観を修することのできない者は、『阿弥陀経』の執持名号の文によつても往生ができることを主張するのである。

四

元照が自らの浄土教を明らかにするために、頻度が多く、重要な位置で引用するのは、善導の書、『十疑論』、遵式の書の三書である。善導の文については、当時、『観経四帖書』の玄義分と『往生礼賛』の二巻のみしか現存しておらず、元照が善導の他の書にも目を通してあれば彼の浄土教はもっと違ったものになっていたと思われる。『十疑論』は智顗に仮託された書であり、曇鸞、道綽の浄土教の要素を多く含んだ書である。遵式は知礼と同門であり、彼は人々に浄土教を鼓吹しているものの、その立脚地は天台教学にあるといえる。やがて時代が下つて、元照は遵式の浄土教を嗣いだ本如の弟子である処謙の影響を受け、善導や『十疑論』の浄土教に基づきながら、知礼の浄土教に批判を加え、当時隅宗として位置づけられていた浄土教の天台宗からの独立を目ざし、そこに自らの往生の法をみいだしていたといえる。

註

- ① 新纂続藏經、五九、六四五、a。
- ② 同、五九、六四五、c。
- ③ 同、五九、六四五、a。
- ④ 大正、三七、三六一、c。
- ⑤ 大正、三七、三六一、c。